

## 【基盤研究(S)】

### 大区分A



## 研究課題名 東アジアにおける農耕の拡散・変容と牧畜社会生成過程の総合的研究

九州大学・大学院人文科学研究院・教授

みやもと かずお  
宮本 一夫

研究課題番号：19H05593 研究者番号：60174207

キーワード：二次的農耕社会、牧畜社会、環境、変動、移住、言語拡散

#### 【研究の背景・目的】

東アジア先史時代は、農耕社会（中国大陸）、二次的農耕社会（東北アジア、中国西南部）、牧畜社会（北アジア）の4地域から成り立っている。この内、東北アジアの二次的農耕社会の文化拡散と変容は、一時的な寒冷化が原因である。一方、牧畜社会はもともと農耕が拡散したところに寒冷・乾燥化することによって成立したことが、ユーラシア草原地帯西部では明らかとなっている。ところが、東アジアの場合、長城地帯・モンゴル高原へどのように農耕が拡散したかの研究はあまり進んでいない。また、農耕社会から紀元前3000年頃の寒冷・乾燥化による牧畜化の過程を考古学的に明らかにしなければならない。それがユーラシア草原地帯西部と同じように農耕社会から牧畜社会を生み出したのか、あるいは、ユーラシア草原地帯西部からの牧畜民の移動によって生み出されたものかを明らかにする必要がある。

#### 【研究の方法】

二次的農耕社会である東北アジアにおいて、水稻農耕が伝播・拡散する過程を明らかにする必要がある。その場合、長江中・下流域などの水稻農耕の起源地と違い、特殊な農耕石器や小型畦畔水田、温帯型ジャポニカなどの東北アジア独自の水稻農耕文化が認められる。これらの農耕文化は、山東東部で生まれた可能性が高い。紀元前3000年頃の寒冷・乾燥化は山東において大きな負荷をもたらしたのであり、そのために灌漑施設を持った小型畦畔水田が生まれ、寒冷地適応した温帯型ジャポニカが生まれた可能性がある。山東省棲霞県楊家圈遺跡は、ボーリング調査とプラント・オパール分析により、龍山文化期の水田遺構が存在する可能性が高い。小型畦畔水田や温帯ジャポニカの成立過程を明らかにするため、楊家圈遺跡での発掘調査や炭化米の粒度分析・DNA分析を行う。また、山東・遼東の先史時代土器の圧痕分析を行い、栽培穀物の伝播過程を明らかにする。また、北アジアにおける初期農耕化から牧畜社会への変遷過程が如何に生まれたかを明らかにするため、モンゴル高原における新石器時代から青銅器時代という生業転換を、土器圧痕分析とともに、古人骨の炭素13安定同位体比分析による食性の変化から明らかにする。そのため、モンゴル高原における新石器時代遺跡あるいは青銅器時代初期の墓地遺跡を発掘し、古人骨を収集する。また、この変化時期にお

ける生業形態の差異を証明するための古人骨の筋付着部発達度分析を行う。さらに人の移動を明らかにす

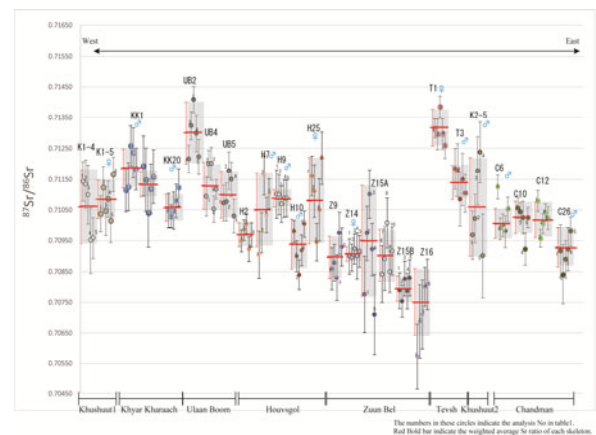


図1 ストロンチウム同位体比分析結果

るため、形質人類学的分析やストロンチウム同位体比分析を行う。

#### 【期待される成果と意義】

東北アジアの二次的農耕化と北アジアの牧畜化の過程を対比的に明らかにすることにより、ヨーロッパや西アジアと異なった東アジアの人類史の特殊性を明らかにする。また、東アジアのそれぞれの地域に固有の古代国家が成立していく背景を知ることができる。さらに、先史社会のヒトの移動や言語集団の移動について考えることができる。

#### 【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

- ・宮本一夫『東北アジアの初期農耕と弥生の起源』同成社、pp.311、2017年
- ・Kazuo Miyamoto ed. Excavations at Emeelt Tolgoi Site: The third Report on Joint Mongolian -Japanese Excavations in Outer Mongolia. Kyushu University, pp.87, 2018

#### 【研究期間と研究経費】

令和元年度～令和5年度  
70,700千円

#### 【ホームページ等】

作成中